

Asian Journal of  
**HUMAN  
SERVICES**

Printed 2015.0430 ISSN2186-3350

Published by Asian Society of Human Services

*April* 2015  
VOL. **8**



## ORIGINAL ARTICLE

# 生活習慣病セルフマネジメントサポーター養成プログラムが看護学生のコミュニケーション・スキルに及ぼす効果

田上 恭子<sup>1)</sup> 井瀧 千恵子<sup>2)</sup> 富澤 登志子<sup>2)</sup>  
北島 麻衣子<sup>2)</sup> 漆坂 真弓<sup>2)</sup>

- 1) 愛知県立大学看護学部  
2) 弘前大学大学院保健学研究科

## &lt;Key-words&gt;

コミュニケーション・スキル, 生活習慣病, 看護

tagamik@nrs.aichi-pu.ac.jp (田上 恭子)

Asian J Human Services, 2015, 8:81-89. © 2015 Asian Society of Human Services

## I. 問題と目的

看護はコミュニケーションに始まりコミュニケーションに終わるといわれており (奈良, 2009)、看護実践においてその基盤となる相互関係の成立・発展にはコミュニケーション能力が欠かせないものとされる (石飛・金山・焼山, 2013)。看護教育において、コミュニケーション・スキルを身につけることができるよう、ロールプレイによる演習や模擬患者の活用など、さまざまな工夫がなされているが (e.g., 石飛・金山・焼山, 2013)、近年、看護学生のコミュニケーション能力や対人関係スキルの低下が指摘され、より一層のコミュニケーション教育に対する強化や創意工夫が求められている (阿部, 2012; 廣瀬・太田・井上ら, 2011)。

A 大学では、生活者としての糖尿病患者を深く理解し、医療者に必要なコミュニケーション能力を培うこと、患者の生活に即したケア提供ができる人材を育成することを主たる目的とし、「生活習慣病セルフマネジメントサポーター養成プログラム」を開発・実践し、学生サポーターを育成している。プログラムの内容は後述するが、1) 設定された講義の受講、2) 設定されたテーマに関する演習への取り組み、3) 月に約 1 回の頻度で開催される糖尿病患者を対象とした健康教室の運営へのボランティアとしての参加、などから構成されている。講義・演習の内容については、看護に関するテーマに加え、運動指導に関するテーマや、カウンセリングやグループアプローチなどの心理臨床分野に関するものまで設定されており、幅広いものとなっている。健康教室への参加に関しては、A 大学ではこれまで糖尿病患者の運動や食事などのセルフマネジメントを支援するための教室を開催しており、ウォーキングなどの運動指導やグループワークなどを行ってきたが (井瀧・富澤・北島ら, 2013; 富澤・北島・倉

Received  
February 6, 2015

Accepted  
March 1, 2015

Published  
April 30, 2015

内ら, 2009; 富澤・野戸・川崎ら, 2007)、この教室において患者と接し、運営に携わることが求められるものである。健康教室は集団力動的アプローチや認知行動的なアプローチが組み込まれた複合的な健康プログラムであり、集団や人間関係のもつ力や患者の心理面への影響も考慮した内容となっている(田上・富澤・北島ら, 2012)。看護学生にとって、このような健康教室の運営に参加し、地域で生活する糖尿病患者との直接のコミュニケーションを体験し、支援に携わるとは貴重な学習の場でもあり、そこでの学びは多岐にわたるものと考えられる。

本研究では1年間のサポーター体験によって、看護学生にどのような変化がもたらされるのか、コミュニケーション・スキルに着目して、プログラムの効果を明らかにすることを目的とする。あわせて、プログラムの効果が学生のソーシャル・スキルの個人差によって異なるかどうかを検討する。

## II. 方法

### 1. 対象

X年度のサポーター養成プログラムに登録した38名の学生のうち、看護学生37名(4年生11名、3年生17名、2年生6名、1年生3名; 以下サポーター群とする)、統制群としてプログラムに参加していない看護学生37名を対象とした。

### 2. サポーター養成プログラムの主な内容

X年度のプログラムの主な内容は以下の通りであった。

- ① 月1回程度の頻度で開催されている糖尿病患者を対象とした健康教室への参加。サポーター学生には、最大4年間で8回以上の健康教室への参加を求めている。また、健康教室の一環であるウォーキング・イベント(年2回)への参加も求めた。
- ② 講義・演習への参加。講義テーマには、「看護師の役割」「健康相談」「運動の基本と指導方法」「身体計測」「コミュニケーションとカウンセリング」などを含む9つのテーマが設定され、最大4年間でこれら全てを受講することを求めた。演習に関しては、ストレッチの指導、運動コースの作成、ファシリテーターの体験、患者を対象としたミニ講義が設定されており、前者2つと後者2つの中から少なくとも1つずつ計2つ以上を選択し取り組むことを求めた。

以上のプログラムと修了条件等について、表1に示した。修了条件を満たした学生に対しては認定証が授与された。

表1 サポーター養成プログラムのテーマ・内容と修了条件

No	テーマ	講義・演習内容
1	サポータープログラムに関するガイド ンス	サポータープログラムの仕組み、学習内容、連絡 先など
2	看護師の役割、患者さんとの接し方	糖尿病患者のセルフマネジメント支援、コミュニ ケーション
3	看護師の役割	リスクマネジメント（AED、低血糖について）
4	ウォーキング・イベント	糖尿病患者の運動療法の一環としてのウォーキン グ・イベントへの参加
5	健康相談	健康相談・運動教室前の健康管理・療養指導など
6	運動の基本と指導方法	運動の生理、効果、指導方法
7	身体計測	様々な機器を使った身体計測・体力測定の方法を 学ぶ
8	コミュニケーションとカウンセリング	グループアプローチとは
9	BLS 受講	4年間のうちに修了
10-1	運動の基本と指導方法	運動コースの作成
10-2	運動の基本と指導方法	ストレッチの指導、体力測定の補助
10-3	コミュニケーションとカウンセリング	ファシリテーターの体験
10-4	集団への指導	提示されたテーマを調べ、糖尿病患者を対象にミ ニ講義

修了条件:

1. 通常の健康教室 8 回以上に参加していること
2. プログラム No.1~9 を受講していること
3. プログラム 10-1、10-2 から 1 つ、10-3、10-4 から 1 つ選択し、実施すること

### 3. 効果測定の問題紙

プログラムの効果の指標としての学生のコミュニケーション・スキルを測定するために、上野（2004）によって作成されたコミュニケーション技術評価スケールのもととなった 60 項目を用いた。この項目は、カウンセリングならびにコミュニケーション技術に関連する文献から抽出されたものと、その教育に関わっている教員からの項目の追加・修正により収集されたものである。この 60 項目について、非常によくできる（非常によく理解している）から全くできない（全く理解していない）の 5 件法で自身のコミュニケーションを自己評価してもらい、回答を求めた。

また、プログラムの効果が学生の個人差によって異なるかを検討するために、学生がそもそも有しているソーシャル・スキルを菊池（1988）による尺度（KISS-18）を用いて測定した。18 項目 5 件法の尺度であった。

この他、学生の運動習慣を尋ねる項目や、糖尿病イメージ、効力感に関する尺度から効果測定の問題紙は構成されたが、本研究では上記の 2 つに関する分析結果を報告する。

### 4. 効果測定の手続き

図 1 に示したように、サポーター群については、プログラムの実施前、実施後の 2 回、記名式で質問紙への回答を求めた。統制群については、プログラム実施後とほぼ同時期に 1 回、同様の質問紙への回答を求めた。

表2 効果測定の時期

		(ベースライン)	
		プログラム前	プログラム後
	<i>n</i>		
サポーター群	37	○	○
統制群	37		○

○ 質問紙による効果測定の実施

### 5. 倫理的配慮

A 大学大学院医学研究科倫理委員会の承認を得て行った。また、分析時に匿名化し個人は特定されないこと、参加の有無による不利益はないことなどを文書で説明し、紙面で同意を得た。

## Ⅲ. 結果

### 1. コミュニケーション・スキルに関する項目の因子分析

質問紙への回答が得られ、欠損値のなかったサポーター群 29 名と統制群 37 名を分析の対象とした。

サポーター群のプログラム前のデータと統制群をあわせた 66 データについて、最尤法、プロマックス回転を用い、因子分析を行った。因子数はスクリープロットをもとに設定し、複数の因子に .40 以上の負荷がみられた項目及びどの因子にも .40 未満の負荷しかみられなかった項目を削除して繰り返し分析を行った。最終的に 30 項目 5 因子構造が得られた。

第 1 因子は「クライアントの内面に焦点をあて、クライアントの感じ方に近い受け止めができる」「クライアントの声の調子に注意することができる」「クライアントがはっきり表現できないでいる感情を代わって言うことができる」など 8 項目から成り、“共感・受容” 因子と命名した。第 2 因子は「クライアントの表現した内容または問題を要約して言うことができる」「クライアントの感情や態度をありのままに受け止めることができる」「はっきりと明瞭なことばで話すことができる」など 7 項目から成り、“カウンセリング技術” 因子と命名した。第 3 因子は「成長欲求の最上は自己実現の欲求であると理解している」「人間は人間性を最高に発揮して生きること（自己実現）が望みであると理解している」など 6 項目から成り、“欲求・自己成長理解” 因子と命名した。第 4 因子は、「人間は相互に影響しあう存在であると理解している」「人間は自分で考えたり行動したりする主体性をもつ存在であると理解している」など 6 項目から成り、“人間観理解” 因子と命名した。第 5 因子は「クライアントの自己決定を尊重することができる」「クライアントに対して心を傾けて聴くことができる」など 3 項目から成り、“カウンセリング姿勢” 因子と命名した。

### 2. サポーター養成プログラム効果の検討: コミュニケーション・スキルに及ぼす効果

因子分析結果に基づき、コミュニケーション・スキルの各因子を構成する項目の平均値をそれぞれ算出し、下位尺度得点とした。

サポーター群 ( $n=29$ ) のプログラム実施前後のコミュニケーション・スキル下位尺度別の平均値と標準偏差を表 1 に示す。サポーター群の下位尺度得点について、プログラムの実施前後で比較した結果、“欲求・自己成長理解” 得点で実施後得点が有意に高いことが示された ( $t(28)=2.28, p<.05$ )。

表 3 サポーター群 ( $n=29$ ) のコミュニケーション・スキル得点のプログラム実施前後の変化

コミュニケーション・スキル下位尺度	実施前	実施後	$t$ 値 ( $df=28$ )
共感・受容	2.53 (0.60)	2.63 (0.45)	1.18
カウンセリング技術	2.77 (0.63)	2.85 (0.53)	0.97
欲求・自己成長理解	2.78 (0.56)	2.94 (0.50)	2.28*
人間観理解	3.18 (0.54)	3.27 (0.47)	1.19
カウンセリング姿勢	3.08 (0.50)	3.17 (0.46)	0.90

( )内は標準偏差

\*  $p<.05$

次に、プログラム実施後のサポーター群のコミュニケーション・スキル得点と統制群の得点を比較した。それぞれの平均値と標準偏差を表 2 に示す。結果、同じく“欲求・自己成長理解”でサポーター群のプログラム実施後得点が統制群よりも有意に高く ( $t(64)=2.71, p<.01$ )、“共感・受容” 得点で高い傾向 ( $t(64)=2.00, p<.10$ ) が認められた。

表 4 コミュニケーション・スキルのサポーター群事後得点と統制群得点との比較

	$n$	共感・受容	カウンセリ ング技術	欲求・自己 成長理解	人間観 理解	カウンセリ ング姿勢
サポーター群	29	2.63 (0.45)	2.85 (0.53)	2.94 (0.50)	3.27 (0.47)	3.17 (0.46)
統制群	37	2.35 (0.65)	2.68 (0.63)	2.50 (0.75)	3.23 (0.53)	3.20 (0.45)
$t$ 値 ( $df=64$ )		1.98 <sup>†</sup>	1.16	2.71**	0.32	0.23

( )内は標準偏差

<sup>†</sup>  $p<.10$  \*\*  $p<.01$

### 3. ソーシャル・スキルの個人差とプログラムの効果との関連

サポーター群の有効回答 28 について分析を行った。

学生がそもそも有しているソーシャル・スキルの個人差がプログラムの効果とどのように関連するかを検討するため、プログラム実施前に KISS-18 で測定されたソーシャル・スキル得点に基づき、高群と低群に分けた。基準はサポーター群 28 名のプログラム実施前得点中央値 56.00 とし、56 点未満 12 名を低群、56 点以上 16 名を高群とした。コミュニケーション・スキルの 5 つの各下位尺度得点について、測定時期 (事前、事後) ×事前のソーシャル・スキル (高、低) の 2 要因分散分析を行った。

測定時期の主効果が有意、もしくは有意傾向だったコミュニケーション・スキルの下位尺度は“欲求・自己成長理解”、“共感・受容”、“人間観理解”の 3 つであり ( $F(1,26)=4.96, p<.05$ ;

$F(1,26)=3.48, p<.10$ ;  $F(1,26)=4.18, p<.10$ )、いずれも事後得点の方が高かった。事前のソーシャル・スキルの主効果が有意もしくは有意傾向であったのは、“共感・受容”、“カウンセリング姿勢”、“カウンセリング技術”、“欲求・自己成長理解”であり ( $F(1,26)=4.45, p<.05$ ;  $F(1,26)=4.40, p<.05$ ;  $F(1,26)=4.20, p<.10$ ;  $F(1,26)=3.08, p<.10$ )、ソーシャル・スキル高群の方が高かった。なお交互作用は認められなかった。

#### IV. 考察

##### 1. サポーター養成プログラムがコミュニケーション・スキルにもたらす効果

サポーター群のプログラム実施前後で有意に変化したコミュニケーション・スキル、及び統制群よりも有意に高くなったコミュニケーション・スキルは、“欲求・自己成長理解”であった。講義・演習を通して、また実際の患者とのコミュニケーションや健康教室の運営に携わることで培われるのは、コミュニケーションにおいては、技術面というよりはむしろ認識面や患者観であると考えられる。ただし、自己成長や欲求に関する内容は、プログラムの講義・演習では直接触れられることは多くはなく、特に健康教室に参加し患者と接する中で特に高まったのではないかと推察される。

同プログラムがサポーター学生にもたらす効果について、PAC分析を用いて学生の体験を検討した北島・井瀧・富澤ら(2012)は、サポーター活動を通しての経験として、患者の普段の生活を知る、日常生活での患者の思いに触れるといった、“患者を生活者として捉える”ことについて最も多く報告されたと述べている。次いで“糖尿病イメージの肯定的変化”も多く語られていたという。また同様に、同プログラムの教育効果について質問紙を用いて検討した富澤・北島・井瀧ら(2013)によると、ここでも糖尿病イメージの肯定的変化が顕著に示され、プログラムを通して患者の見方が肯定的になることが見出されている。このような結果と本研究の結果をあわせて考えると、健康教室に参加し患者と関わる中で、患者を生活者として捉えることができるようになり、患者の中にある人間としての“力”、すなわち成長欲求を感じ、人間の成長欲求や自己実現について理解できるようになったのではないかとということが示唆され得る。そしてこのことが患者観や糖尿病という疾病観、イメージを肯定的に変化させていくのではないかと考えられる。このようなプログラムに参加した直後においては、まずこのような認識面での変化が促され、それが後に実際のコミュニケーションの技術に反映されていくことも考えられよう。

コミュニケーションの技術面に関しては、先行研究の多くで検討されているように(石飛・金山・焼山, 2013)、授業や実習といった大学教育の中での工夫、たとえばロールプレイや技法のトレーニングを通して身につけることも必要であると考えられる。しかしながら、対人援助においては技術だけ身につければいいというものではない。河合(1970)はカウンセリングの学びに関して、クライアントと向き合っていく際には、基本的な姿勢・態度や技法を身につけていくだけではなく、人間を理解するための理論を学び、人間を理解するための知識を増やす努力もしなければならぬと述べている。そのような人間理解のひとつの視点を養う効果が、地域の患者を対象とした健康教室の参加と、参加体験で終わりではなくそれを裏打ちする講義・演習から構成される本プログラムからもたらされると考えられる。

## 2. ソーシャル・スキルの個人差とプログラムの効果との関連

学生のソーシャル・スキルの個人差がプログラムの効果とどのように関連するか検討した結果、そもそもソーシャル・スキルが高い学生は全般的にコミュニケーション・スキルも高いことが示されたが、交互作用は認められなかった。このことから、個人差としてのソーシャル・スキルの高低にかかわらず、本プログラムはある程度一定の効果をもたらす可能性が示唆される。

## V. まとめと今後の課題

1年間のサポーター養成プログラムを通して、看護学生にはコミュニケーション・スキルの中でもその認識面や人間観・患者観に関する面で顕著な変化が認められることが示唆された。前述のように、看護実践においてコミュニケーション・スキルは欠かすことができないものであり、看護教育の中で獲得・向上させる取り組みが求められているが、その基盤となる人間理解のひとつの視点を養うことに、地域の患者と関わる体験的な学びとそれを理論的に支える講義・演習から成る本プログラムは貢献するものと考えられる。

本研究では、コミュニケーション・スキルの技術的な側面に関しては顕著な効果は認められなかった。したがって、コミュニケーション・スキルの技術を高めるためには、それ自体をターゲットとした教育が必要であるとも考えられる。ただし本研究で測定したコミュニケーション・スキルは、あくまで自己報告に基づくものである。地域の患者と接する体験の中で、コミュニケーションに関する自己評価が実際以上に低くなった学生もいる可能性は否定できない。コミュニケーション・スキルの測定に関しては、自己報告式の質問紙のみではなく、多面的な測定・評価が今後には必要であるだろう。また前述したように、人間理解の視点が養われ、患者観や疾病観が肯定的に変化した後で、コミュニケーション・スキルが変容していく可能性も考えられ得る。より長期的な効果の検討が必要であると考えられる。

なお本研究の限界と課題として次の2点が考えられる。

第一に本研究の結果は、学生にとっては最大4年間かけて参加・受講することができるプログラムの1年間の効果を抽出したものであり、プログラムの部分的な効果であるという点である。また参加学生それぞれが1年間でどのような講義・演習を体験し、教室にどの程度関与していたかという個人差の影響は検討しておらず、あくまで対象となった学生が平均的に参加した1年間のプログラムの影響を示したものであるといえる。今後は経験の積み重ねの影響を検討することや、修了条件を満たした学生を対象としたプログラム全体としての効果を明らかにすることが必要であるだろう。さらには長期的な効果についても検討していくことが必要であると考えられる。

第二に、統制群においてプログラム前の測定を行わなかったことの問題が挙げられる。統制群のプログラム前後の得点との比較が行われていないことから、サポーター群でみられた変化が時間の経過により生じた成熟・発達・学習によるものである可能性や、参加者の多くが共通して体験したような出来事による可能性を完全に否定することはできない。プログラムの効果を示すためには、今後は厳密なデザインによる研究が必要であるだろう。

以上のように、幾つかの課題は残されているが、このようなプログラムの検討を重ねより効果的なプログラムを開発していくことは、看護学生のコミュニケーション・スキルの向上、さらにはよりよい看護実践につながっていくものと考えられる。そしてこのことは、生活習



慣病のセルフマネジメントへの支援をはじめ、よりよい医療の提供に貢献するものであるだろう。

### 付記

本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「糖尿病セルフマネジメント支援に関する学生教育プログラムの開発(研究代表者 井瀧千恵子; 課題番号 23593121)」の助成を受けて実施された。

### 文献

- 1) 阿部智美(2012) イメージマップ・テストからみえた看護学生の「患者とのコミュニケーションスキル」の獲得状況. 日本教育工学会論文誌, 36, 105-108.
- 2) 廣瀬春次・太田智子・井上真奈美・中村仁志(2011) 看護学生のコミュニケーション行動に関する研究. 山口県立大学学術情報, 4, 47-53.
- 3) 石飛マリコ・金山正子・焼山和憲(2013) 看護系大学入学後の初期段階におけるコミュニケーションスキルを高める教育方法の検討—対話技法の効果に焦点をあてて—. 福岡大学医学紀要, 40, 73-80.
- 4) 井瀧千恵子・富澤登志子・北島麻衣子・漆坂真弓・工藤うみ・野戸結花ら(2013) 2型糖尿病患者の健康プログラム介入群と対照群の身体活動量の比較. 保健科学研究, 3, 79-84.
- 5) 河合隼雄(1970) カウンセリングの実際問題. 誠信書房.
- 6) 菊池章夫(1988) 思いやりを科学する. 川島書店.
- 7) 北島麻衣子・井瀧千恵子・富澤登志子・漆坂真弓・田上恭子(2012) 生活習慣病セルフマネジメントプログラムの効果—PAC 分析によるプログラム参加学生の経験から—. 日本看護科学学会学術集会講演集, 32, 493.
- 8) 奈良知子(2009) 看護学生のコミュニケーション技術教育の効果と問題点. 弘前医療福祉大学, 1, 59-66.
- 9) 田上恭子・富澤登志子・北島麻衣子・工藤うみ(2012) グループワークを組み合わせた運動プログラムの心理的効果: 糖尿病患者に対する効果的なプログラムの開発に向けて. Asian Journal of Human Services, 2, 67-80.
- 10) 富澤登志子・北島麻衣子・井瀧千恵子・漆坂真弓・田上恭子・小沢久美子(2013) 生活習慣病セルフマネジメントサポータープログラムによる看護学生への教育効果. 日本看護科学学会学術集会講演集, 33, 474.
- 11) 富澤登志子・北島麻衣子・倉内静香・野戸結花・井瀧千恵子・工藤うみら(2009) 糖尿病患者への運動習慣化を目的とした集団力学的アプローチによる健康プログラムの効果に関する研究—長期介入による気分への影響について—. 木村看護教育振興財団看護研究集録, 16, 83-89.
- 12) 富澤登志子・野戸結花・川崎くみ子・井瀧千恵子・工藤うみ・安森由美ら(2007) 糖尿病患者への集団力学的アプローチの効果に関する研究. 健康医科学研究助成論文集, 22, 92-100.
- 13) 上野玲子(2004) コミュニケーション技術評価スケールの開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護学教育学会誌, 14, 1-12.

## ORIGINAL ARTICLE

# The Effects of a Self-management Support Program for Lifestyle-related Diseases on Communication Skills of Nursing Students

Kyoko TAGAMI <sup>1)</sup> Chieko ITAKI <sup>2)</sup> Toshiko TOMISAWA <sup>2)</sup>  
Maiko KITAJIMA <sup>2)</sup> Mayumi URUSIZAKA <sup>2)</sup>

1) Aichi Prefectural University, School of Nursing and Health

2) Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

## ABSTRACT

The effects of participating in a self-management support program for patients with lifestyle-related diseases on the communication skills of nursing students were investigated. Nursing students ( $n=37$ ) participated in the program for a year, including joining in a health education program for patients with diabetes mellitus, receiving lecture on the role of nurses, health consultation and guidance, exercise guidance, and counseling. Nursing students also had opportunities to practice what they had learned in the lectures as part of the program. Nursing students also completed a set of questionnaires consisting of items measuring communication skills, social skill, and other variables, before and after participating. Results indicated that post-program scores for “recognition of needs and self-growth” factor were significantly higher than before the program. It is suggested that participating in this program was more effective in changing nursing students’ understanding of patients and increasing their awareness of communication.

<Key-words>

communication skills, lifestyle-related diseases, nursing

tagamik@nrs.aichi-pu.ac.jp (Kyoko TAGAMI)

Asian J Human Services, 2015, 8:81-89. © 2015 Asian Society of Human Services

Received  
February 6,2015

Accepted  
March 1,2015

Published  
April 30,2015

*CONTENTS*

**ORIGINAL ARTICLES**

Who Intends to Leave Residential Institutions for Persons with Disabilities in Korea?.....	<b>Sunwoo LEE</b>	1
Measuring Inhibitory Control without Requiring Reading Skill.....	<b>Hideyuki OKUZUMI, et al.</b>	13
The Current Condition and Underlying Problems of Social Service in Korea.....	<b>Taekyun YOO, et al.</b>	20
Impact of Movement Cost on Income and Expenditure Ratio in Home-Visit Long-Term Care Service Businesses in Japan.....	<b>Hitoshi SASAKI, et al.</b>	34
Study of Treatments and their Effects on Behaviour Improvement of Children with Problem Behaviour such as ADHD.....	<b>Eonji KIM, et al.</b>	51
The Development of Inclusive Education Assessment Indicator(IEAD) and the Analysis of Laws and Institutional Policies in Japan.....	<b>Changwan HAN, et al.</b>	66
The Effects of a Self-management Support Program for Lifestyle-related Diseases on Communication Skills of Nursing Students.....	<b>Kyoko TAGAMI, et al.</b>	81
The Development Draft of the Outcome Evaluation Tool for Companies Employing Persons with Disabilities in Japan and Korea : The Development Draft Evaluation Tool to the Social Contribution Outcome and Evaluation Index to the Management Outcome.....	<b>Moonjung KIM, et al.</b>	90
A Study on the Development of Employment System Assessment Indicator & Tool for Persons with Disabilities from the Perspective of QOL.....	<b>Haejin KWON</b>	107

**REVIEW ARTICLES**

The Definitions of Multimorbidity and Multiple Disabilities(MMD) and the Rehabilitation for MMD.....	<b>Masahiro KOHZUKI</b>	120
The Effects of Exercise, Cognitive Intervention and Combined Exercise and Cognitive Intervention in Alder Adults with Cognitive Impairment and Alzheimer's Disease : a literature review.....	<b>Minji KIM, et al.</b>	131

**SHORT PAPERS**

A Study of "Cultural Competence" in Taiwanese Social Work Research : Using Quantitative Content Analysis.....	<b>Liting CHEN</b>	152
The Current Situation and Limitation of Learning Support for Students with Disabilities in Japan : Support for Students with Visual, Auditory, and Physical Disabilities.....	<b>Kohei MORI, et al.</b>	162
Examination of the Issues with and the Support System of Volunteer Activity for Elderly People with Dementia.....	<b>Misako NOTO, et al.</b>	177
A Study on the Use of ICT Education Indicators (Draft) Development in Special Needs Education : Focus on Japan and South Korea.....	<b>Sunhee LEE</b>	189